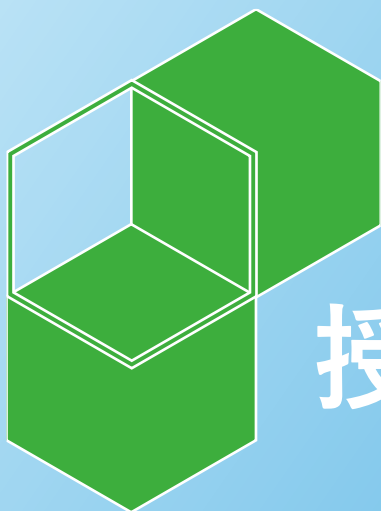


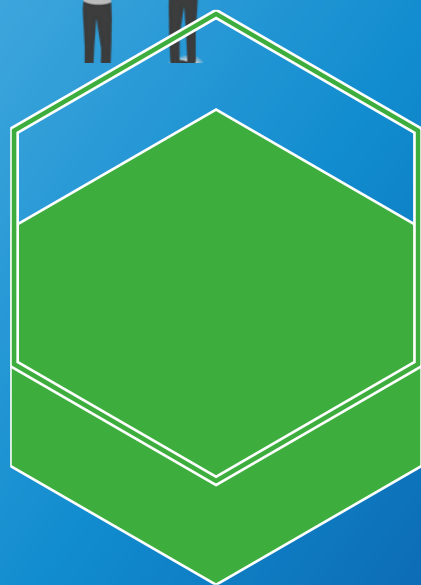


授業評価報告書

Course Evaluation Report



2025



国立大学法人

鳴門教育大学
Naruto University of Education



高等教育機関である大学にとって、教育の質の向上は社会に対する不変の責務であり、その質を保証する回路の根幹をなすのが日々の「授業」である。

本学では、授業の検証・省察・改善を組織的に駆動させるため、学生による授業評価アンケートを内部質保証および教学IR（Institutional Research）の不可欠なエンジンとして位置付けている。本報告書は、2025年度の本学における教育実践を多角的に分析し、次なる質的向上のための設計図として作成されたものである。

現在、本学は「セルフデザイン型学修」への構造的転換という大きな過渡期にある。2025年度には、学生の学びのコンパスとなる「鳴門パースペクティブ」、AIによる分析・フィードバックを実装したアプリ「セルデザ」、そして地域課題の解決に挑む「セルデザクエスト」といった各ツールが揃い、学生が自らの教師像を主体的に描き出す自己伸長型教育の基盤が整った。また、BYOD（個人端末持参）を前提とした学修環境の整備や、電子黒板等を配備した新しい共通講義B棟の運用開始は、主体的・協働的な学びを加速させる重要な契機となっている。

本報告書では、学士課程、修士課程、専門職学位課程（通学・遠隔）の各課程を共通の指標で構造化し、横断的な比較・検証を可能とした。多様化する本学の教育形態が学生の専門性深化にいかに関与しているかを精緻に捉えることは、本学が教師教育の先導的モデルを発信し続けるために極めて重要である。本報告書に示されたデータは、教員個々の授業改善を支えるのみならず、本学が掲げる「主体的に学び創造的に実践する教師」の育成というミッションが、いかに具現化されているかを映し出す鏡である。本学の全教職員がこれらの分析結果を真摯に受け止め、教育という複雑なシステムの最適化に向けた共創的な対話を深めるための一助となることを切に願うものである。

2026（令和8）年度 教務委員会 学生による授業評価専門部会 主査 宮本 賢治

はしがき	・・・・・・・・	1
目次	・・・・・・・・	2
2025（令和7）年度授業評価の集計結果（概要）	・・・・・・・・	3
1.学士課程	[01] 授業の計画と内容について	4
	[02] 授業の進め方について	5
	[03] 令和5年度新設3科目群について	6
	[04] 授業への取り組み・満足度について	7
2.修士課程	[01] 授業の計画と内容について	8
	[02] 授業の進め方について	9
	[03] 授業への取り組み・満足度について	10
3.専門職学位課程＜通学＞	[01] 授業の計画と内容について	11
	[02] 授業の進め方について	12
	[03] 授業への取り組み・満足度について	13
4.専門職学位課程＜遠隔＞	[01] 授業の計画と内容について	14
	[02] 授業の進め方について	15
	[03] 授業への取り組み・満足度について	16
参考資料	[01] 授業評価実施要領	17
	[02] 授業評価報告書の作成体制	18
	[03] 授業評価報告書の作成スケジュール	19



1. 2025（令和7）年度授業評価の集計結果（概要）



課程	授業科目数（授業評価実施対象のみ）  =100科目	回答率（延べ回答者数／延べ受講者数）  =1,000人
学士課程	519科目 	44%（4,570人／10,309人） 
修士課程	106科目 	70%（1,143人／1,622人） 
専門職学位課程（通学）	306科目 	63%（1,666人／2,638人） 
専門職学位課程（遠隔）	98科目 	69%（754人／1,091人） 

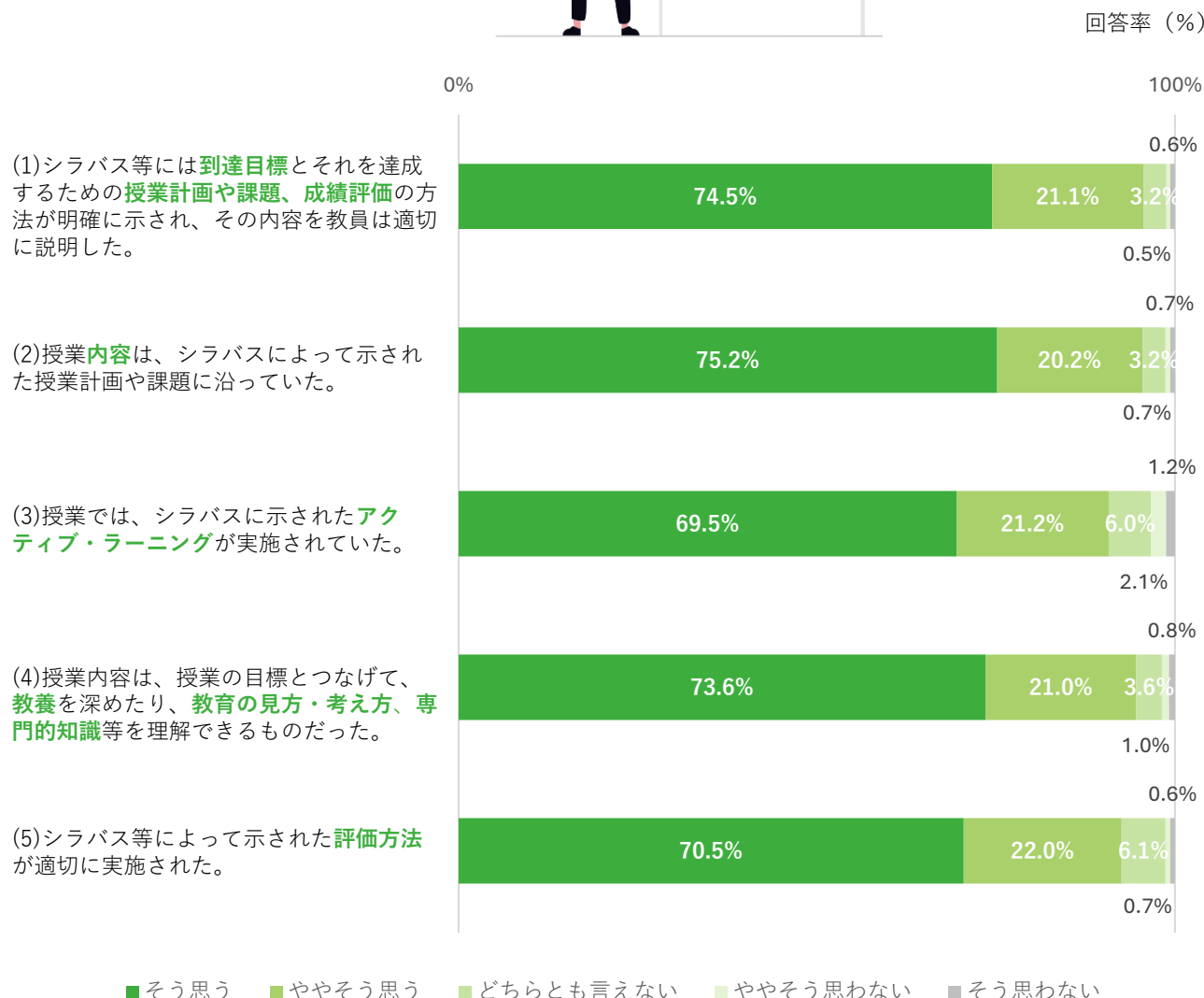
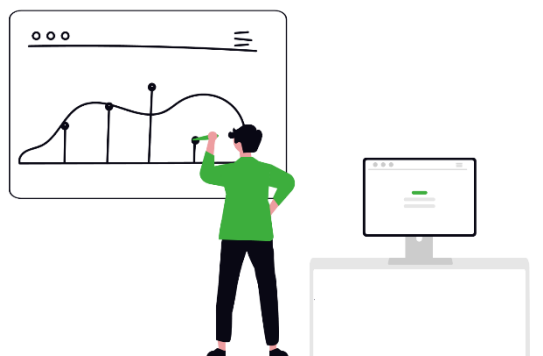
授業評価アンケートの回答方法は、2023（令和5）年度後期から教務システム（Live Campus U）を活用したweb回答を導入しており、学生が回答に取り組みやすくすることを通して、回答率の向上を図っている。

2025（令和7）年度は、専門職学位課程（通学）は微増（61%→63%）しているものの、その他の課程では減少しており、特に学士課程の減少率が高くなっている（49%→44%）。

学士課程においては、「セルフデザイン型学修」を推進するため、スマホアプリ「セルデザ」を活用した日々の省察やAIによるフィードバックを日常的に受ける機会が整備されている中で、新たに全国学生調査も開始されるなど、学生が学修活動を振り返る機会が多く設定されており、従来の授業評価アンケートがこれらの取り組みと重複する面もあることから、回答が伸び悩んでいる可能性も考えられる。

引き続き、授業担当教員による丁寧な案内や授業時間内での回答時間の確保などの回答促進に向けた地道な働きかけが求められる。

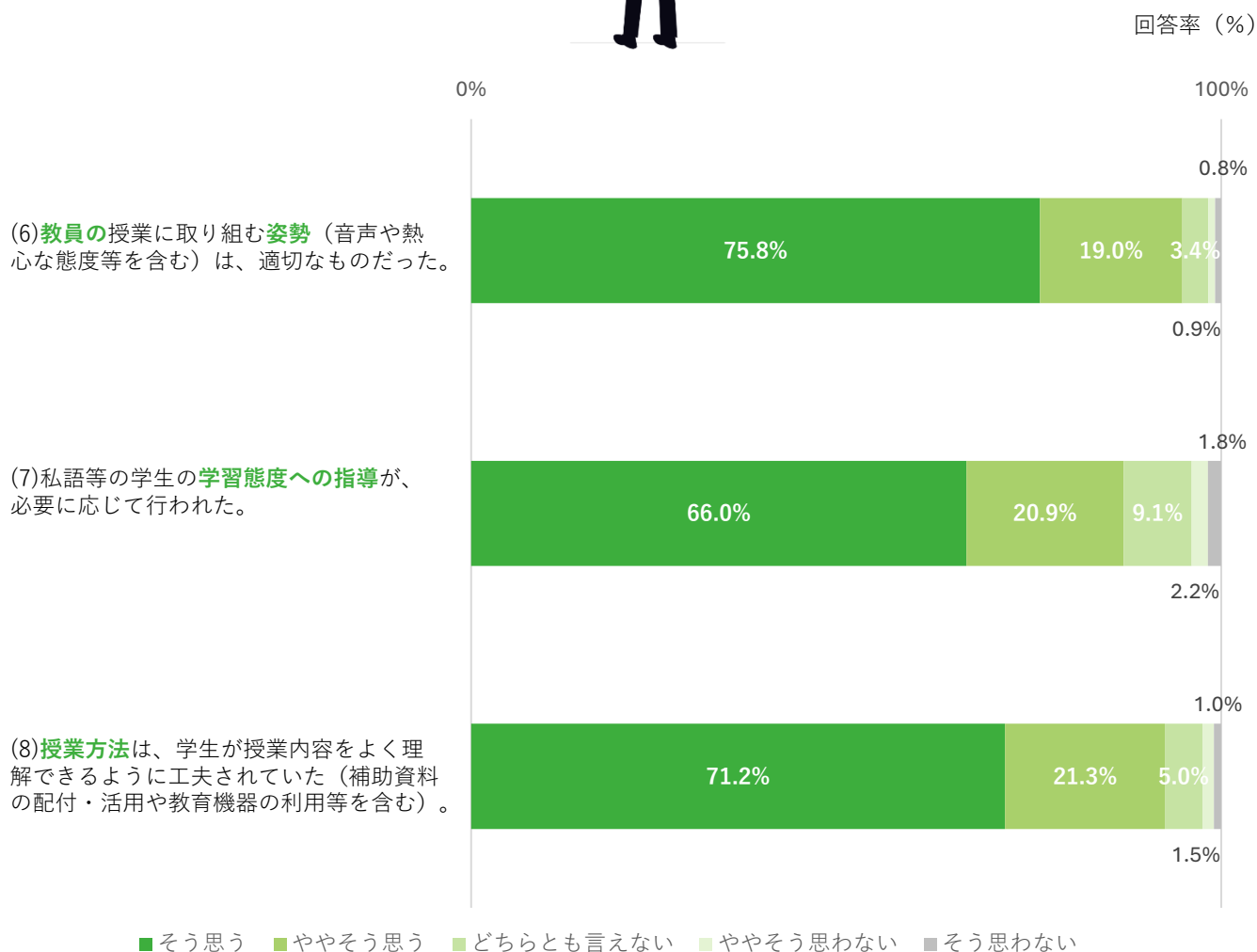
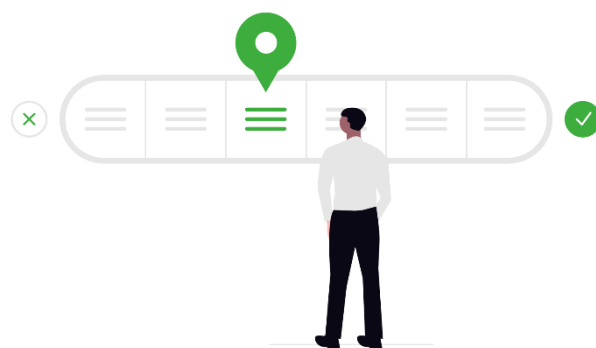
[01] 授業の計画と内容について



2025年度も**全項目においてポジティブな回答**（「そう思う」「ややそう思う」）の割合が**90%を超える**良好な結果となった。特に(1)95.6%、(2)95.4%、(4)94.6%という高い数値は、授業がシラバスに基づき適切に実施され、**専門的知識を深める内容であると学生に高く評価されている**ことを示している。

一方で、2024年度と比較すると全項目で数値が微減しており、例えば(1)は96.2%から95.6%へ、(5)は93.6%から92.5%へと推移している。特筆すべきは(3)で、ポジティブ回答が90.7%（前年度92.2%）と項目中で最低となり、「どちらとも言えない」の割合も6.0%（前年度5.3%）へと増加した。前年度から続く**教員・学生間でのアクティブ・ラーニングの認識乖離**という課題と、学士課程全体の授業評価アンケート回答率が低下した背景も踏まえ、**学生の学修意欲やエンゲージメントの変化**という視点での継続的な分析が必要である。

[02] 授業の進め方について



2025年度も(6)94.8%（前年度95.6%）、(8)92.5%（同94.2%）と、ポジティブな回答（「そう思う」「ややそう思う」）が90%を超える高い水準を維持した。この結果から、多くの学生が**教員の熱意ある姿勢**や、理解を助けるための**教材活用等の工夫を肯定的に捉えている**ことがわかる。

一方で、2024年度と比較すると全項目で数値が微減しており、特に(7)学生の学修態度への指導については、ポジティブ回答が86.9%（前年度88.4%）と項目中で最も低く、「どちらとも言えない」も9.1%（前年度9.2%）と高止まりしている。前年度の報告では教員の指導姿勢への懸念が示されていたが、引き続き(7)の評価が相対的に低いことから、**対面授業における規律維持**や「学びの場」の雰囲気作りといったクラスマネジメントの再構築が求められている。**学生の集中力を維持できる環境整備**が、今後の質の高い授業展開の鍵となるだろう。

[03] 令和5年度新設3科目群について

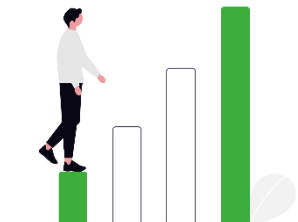
ICT活用指導力育成科目群



現代的教育課題対応コア科目群



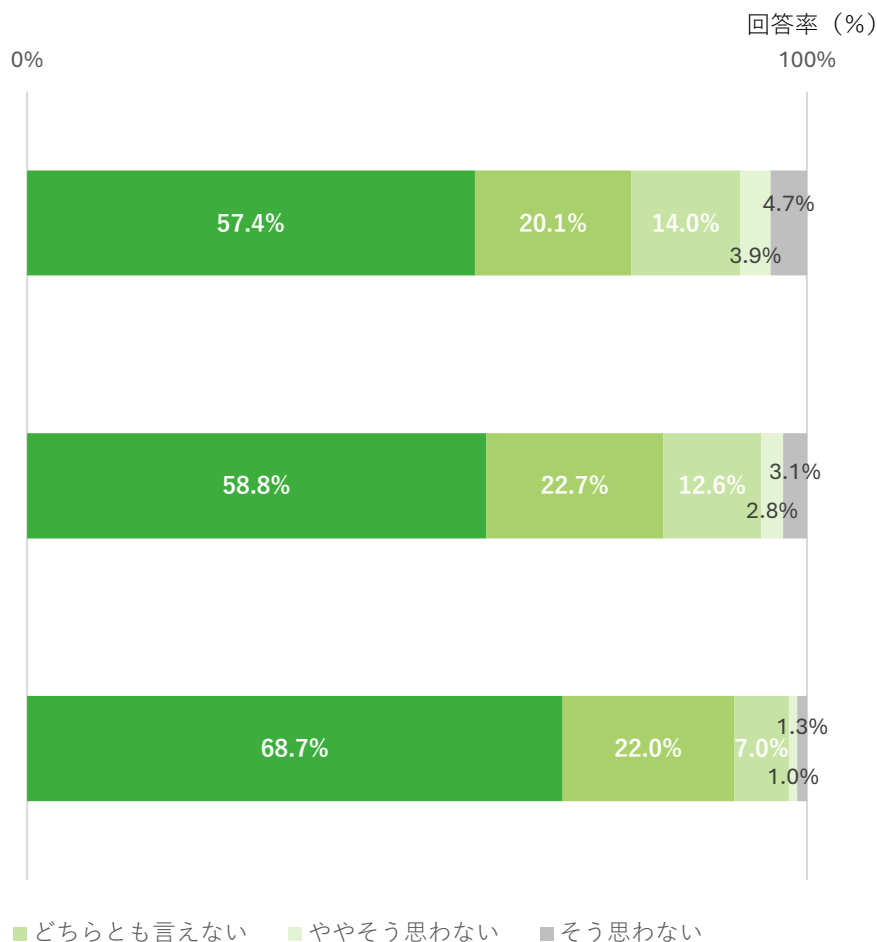
初年次教育科目群



(9) **ICT活用指導力育成科目群**：
今日の学校教育を踏まえ、教員に求められる情報通信技術（ICT）活用指導力を学ぶことができる授業内容だった。

(10) **現代的教育課題対応コア科目群**：
社会における多様化・個別化する課題（例：ダイバーシティ・国際理解教育・発達の多様性・いじめ問題等）とその現状を理解でき、課題の解決に必要な手立てや基本的態度を学ぶことができる授業内容だった。

(11) **初年次教育科目群**：
鳴教大生としての学修の基礎となる見方・考え方、学び方、態度を身に付けることができる授業内容だった。



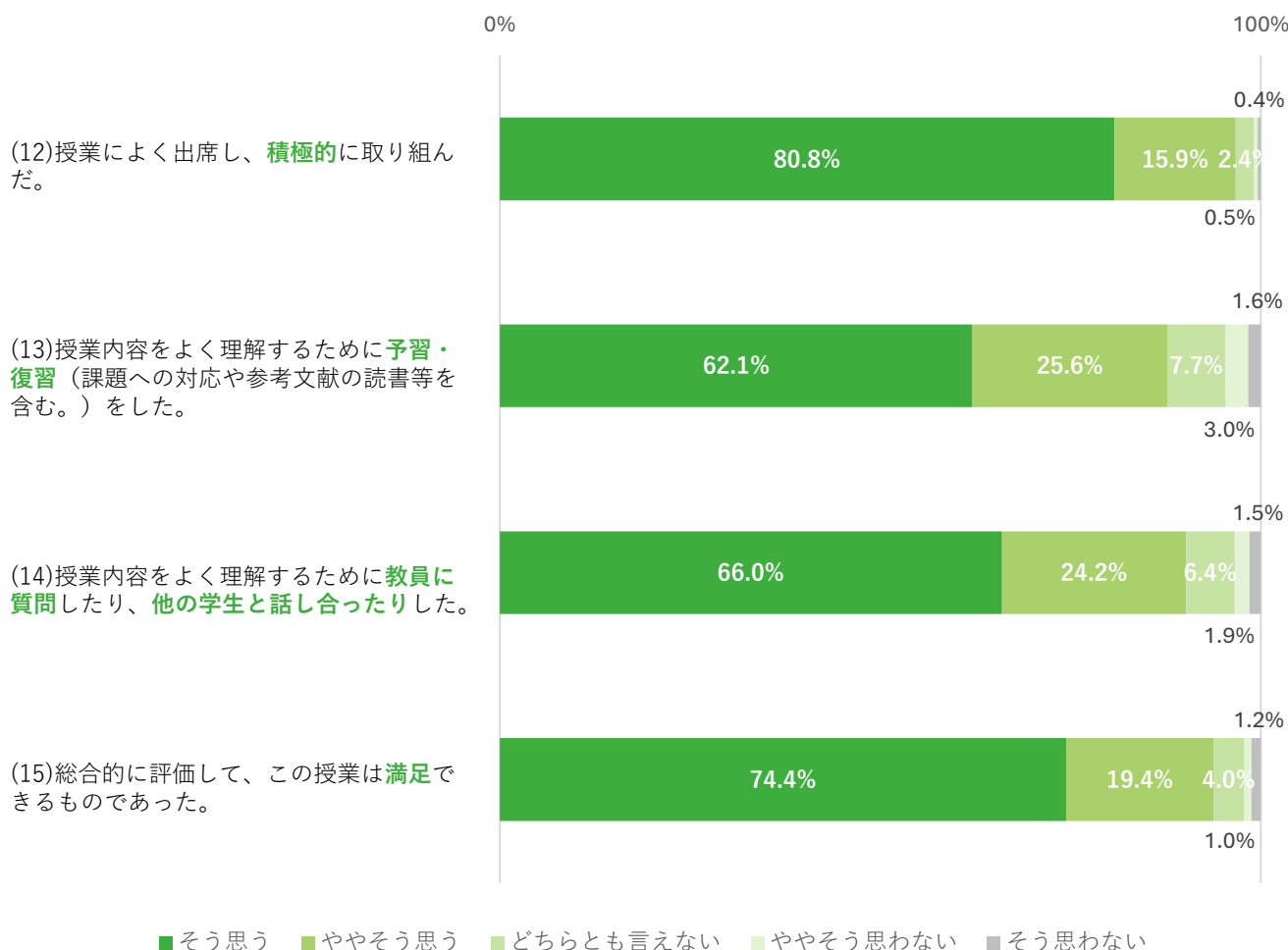
2025年度の結果では、(11)初年次教育科目群において「そう思う」の回答割合が68.7%（前年度65.3%）へと上昇した。**大学での学修基盤形成**に対し、**より確かな教育効果を実感する学生層**が着実に増えている点は、好ましい傾向として評価できる。

一方で、肯定的回答（「そう思う」「ややそう思う」）の合計は、(9)77.5%（同87.2%）、(10)81.5%（同95.5%）、(11)90.7%（前年度96.4%）といずれも前年度を下回った。特に(9)と(10)では「どちらとも言えない」の割合が14.0%および12.6%に達している。この要因として、専門性の高い領域では、**学生個々の既有知識や関心の多様化**により、授業内容から得られる学修成果の実感に差が生じやすくなっている可能性が推察される。今後は、特に評価の低下が著しい項目を中心に、**学生の学修実態と授業のねらいとの間に生じている乖離**をいかに把握し改善につなげるかが、今後における重要な展望となる。

[04] 授業への取り組み・満足度について



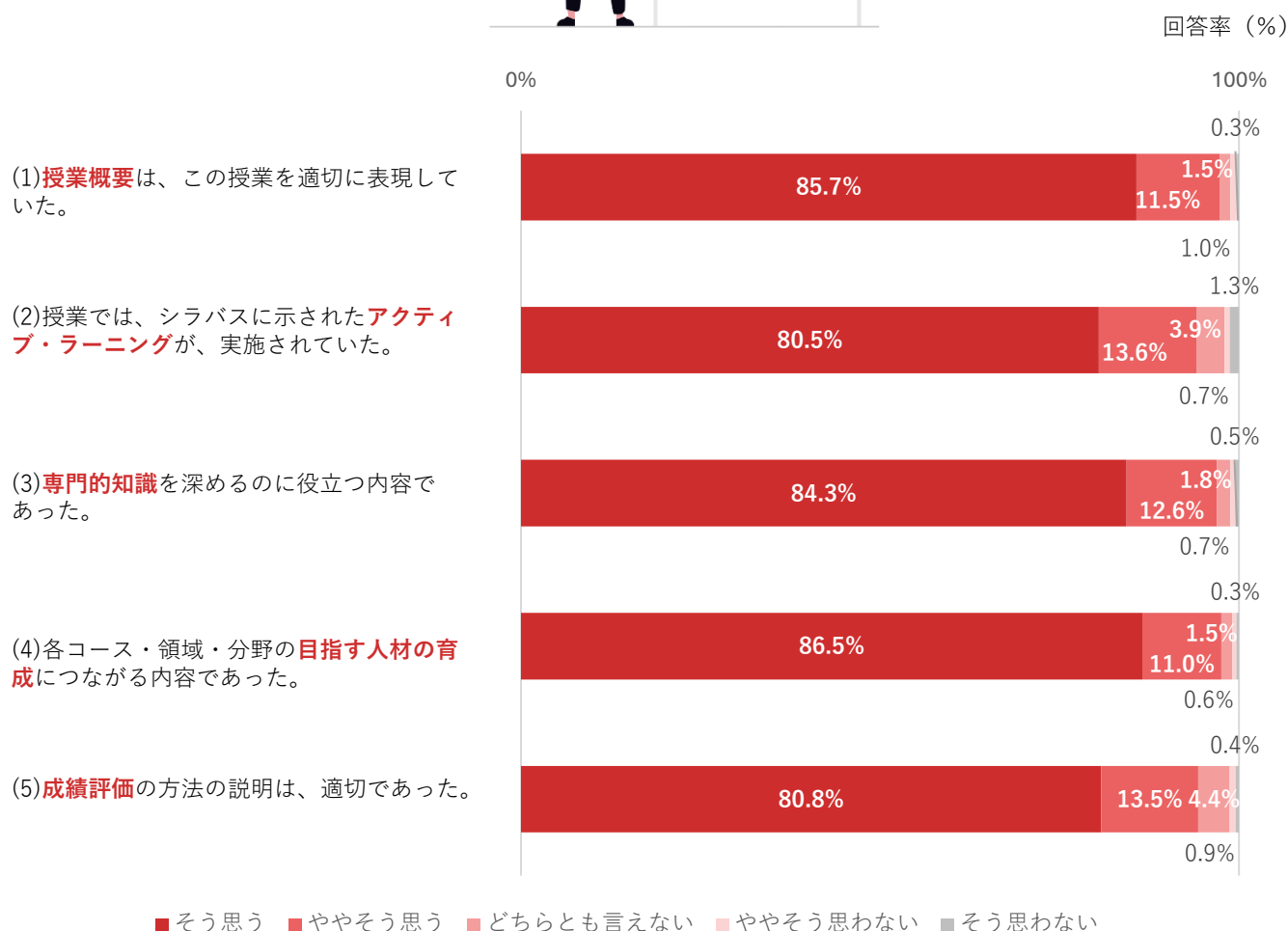
回答率 (%)



2025年度も、全設問でポジティブな回答（「そう思う」「ややそう思う」）が90%前後の高い水準にあり、**学生が総じて満足感を持って授業に臨んでいる**ことが伺える。特に(12)は96.7%（前年度96.8%）と極めて高く、**学生の学習態度は概ね良好に維持**されている。一方で、総合的な評価である(15)は93.8%（前年度95.0%）とわずかに低下した。

項目別では、(13)が87.7%（前年度88.7%）と項目中で最も低く、(14)も90.2%（前年度92.4%）へと下落している。出席等の受動的な態度の高さに比べ、予習復習や対話といった**能動的な学修への移行には依然として課題**が残る。今後は、満足度の質をさらに向上させるため、学生が単に授業を受けるだけでなく、他者との対話や授業外学修を通じて**「自ら学びを深める意義」をより実感を伴って捉えられるような環境整備**が、学修成果の定着に向けた重要な展望となる。また、学生が授業内容をよく理解し能動的に学べるように、予習・復習の徹底を図ることが望ましい。

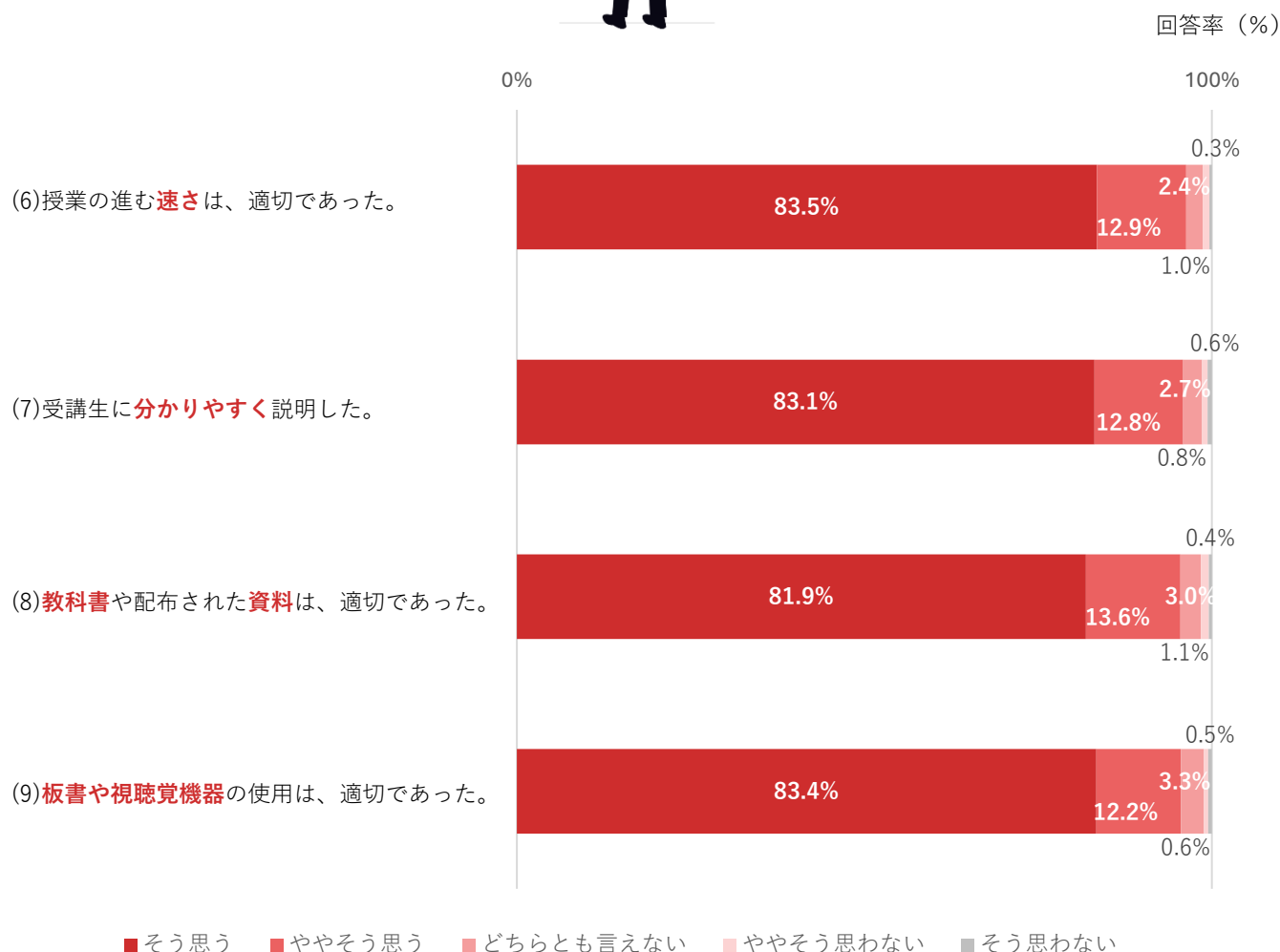
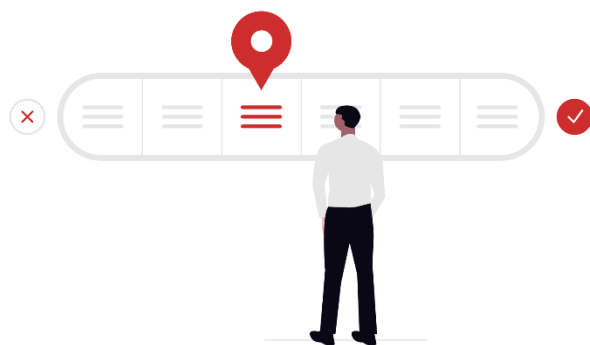
[01] 授業の計画と内容について



2025年度は、全設問においてポジティブな回答（「そう思う」「ややそう思う」）の割合が94%を上回る結果となった。特に(1)が97.2%（同95.8%）、(4)が97.5%（前年度96.4%）に達しており、**授業内容が各専攻等の目指す人材育成に直結し**、シラバスに即した適切な設計がなされていると学生に肯定的に受け止められている。強い肯定的回答である「そう思う」の割合に着目すると、前年度に他の項目より相対的に低かった項目で数値の向上が見られる。前年度は(2)が75.3%、(5)が72.8%であったが、今年度は(2)80.5%、(5)80.8%へと上昇した。この結果、今年度は(1)から(5)の全ての項目において**強い肯定的な回答の割合が80%を超えるに至った**。

修士課程においては、ポジティブ回答の高い水準を維持しつつ、前年度比で「強い肯定」の層が全体的に底上げされた傾向にある。今後は、こうした良好な回答状況を維持するとともに、学生の高度な専門性の探究をさらに支援するような、**質を重視した授業運営を継続**していくことが展望となる。

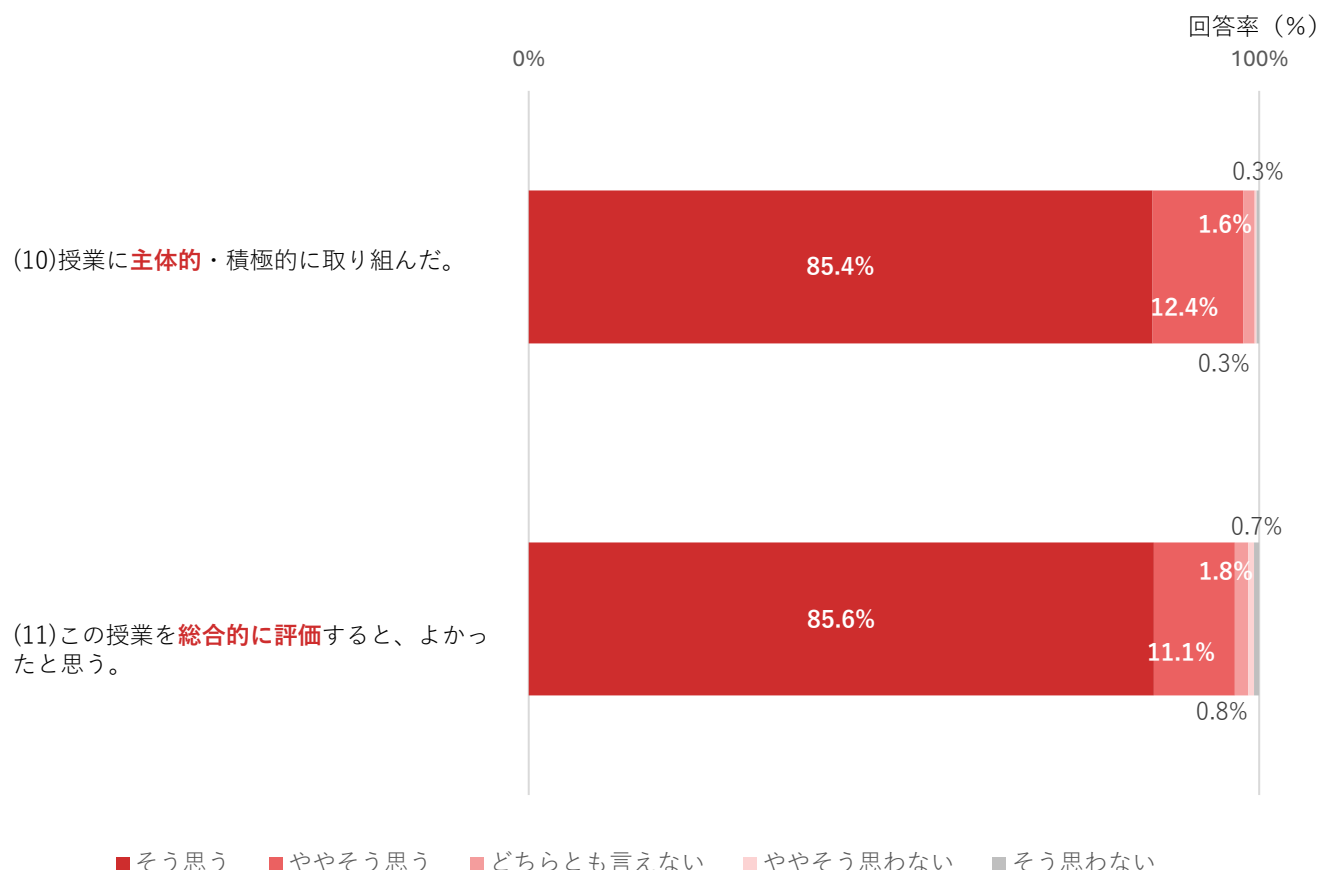
[02] 授業の進め方について



2025年度は、全設問でポジティブな回答（「そう思う」「ややそう思う」）の割合が95%を上回り、前年度の93%台からさらなる向上が見られた。特に(6)が96.4%（前年度93.6%）、(9)が95.6%（同94.1%）に達しており、**授業の速度や視聴覚機器の活用が適切に評価**されていることが伺える。特筆すべきは、強い肯定的回答である「そう思う」の割合が大幅に上昇した点である。前年度は(6)から(9)の全項目で約75～76%であったが、今年度は全ての設問で80%を超える結果となった。前年度の報告書で目標とされていた数値水準に到達しており、**共通講義B棟の改修に伴う機器活用**やそれに伴う資料提示の工夫といった**教育環境の整備が、実効性を伴って学生の理解を助けている**ことが推察される。

今後は、この高い水準を維持しつつ、修士課程における高度な専門的探究をさらに支えるような、教材活用と説明のあり方を継続的に探究していくことが重要な展望となる。

[03] 授業への取り組み・満足度について

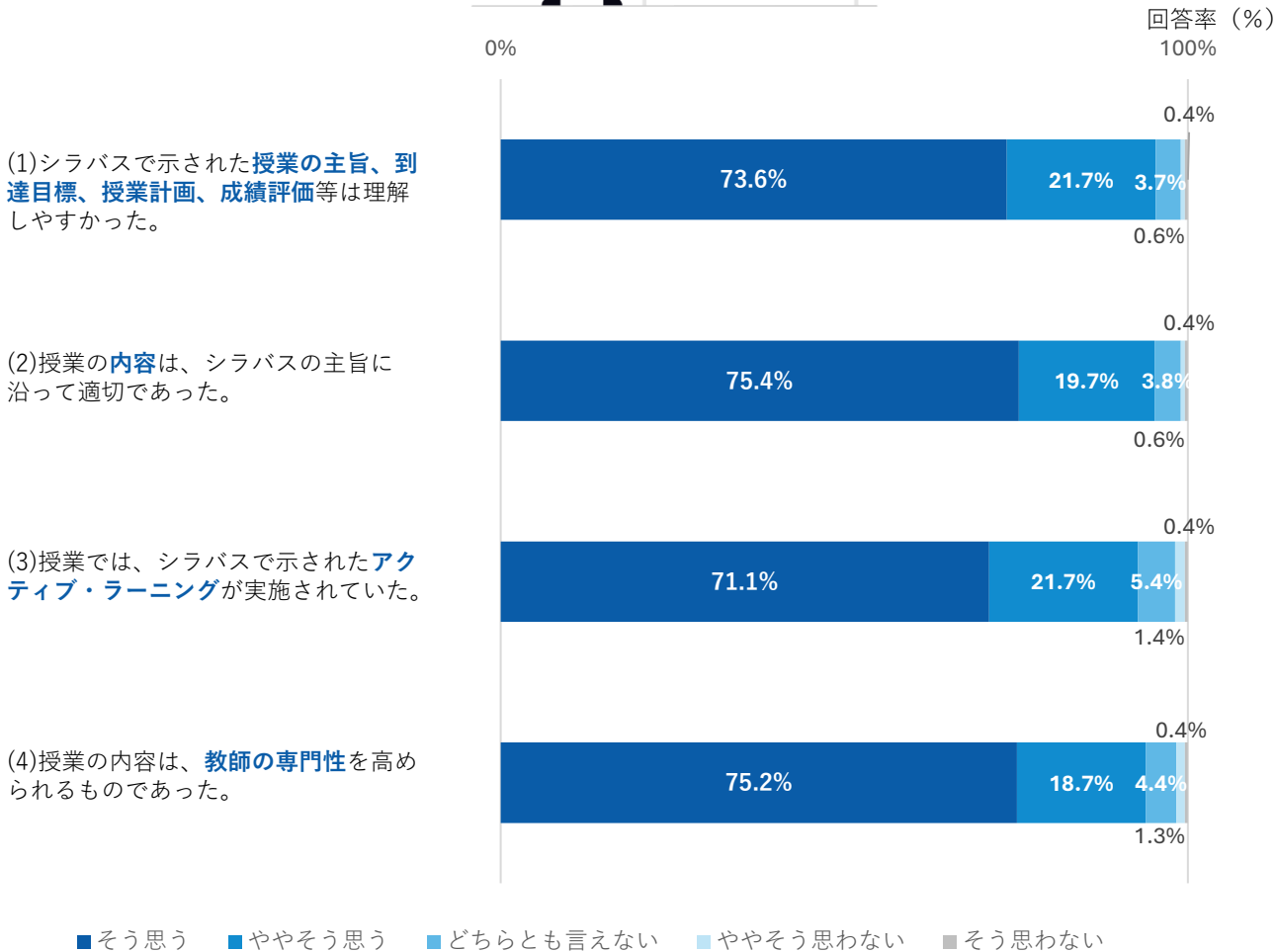


2025年度の修士課程では、学生自身の主体的な学修態度を示す(10)が97.8%、総合評価である(11)が96.7%に達しており、極めて高い肯定的回答が得られた。特に、前年度に8割を下回っていた「そう思う」の割合が、(10)で85.4%（前年度77.9%）、(11)で85.6%（同78.4%）へと大幅に上昇しており、**授業全般に関しての質的な改善が顕著**に見られる。

高い総合的評価の背景には、**アンケート全体における良好な結果**が大きく寄与していると推察される。「[01] 授業の計画と内容について」は全設問で肯定的回答が94%を超え、専門性を深める適切な授業設計が評価された。また「[02] 授業の進め方について」も、教育環境の整備に伴う資料提示や機器活用の工夫が95%を上回る高い評価を得た。これら**計画的かつ効果的な授業実践が、学生の意欲を適切に引き出し、最終的な授業への充足感へと結実**したと言える。

今後は、この良好な状況を維持しつつ、学生がさらに専門性を主体的に深めていけるよう、質の高い学修支援を継続していくことが重要な展望となる。

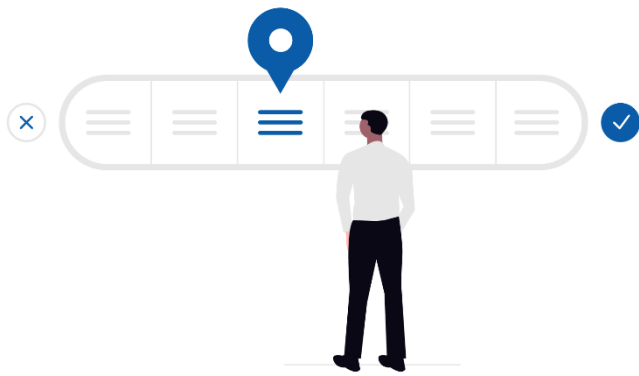
[01] 授業の計画と内容について



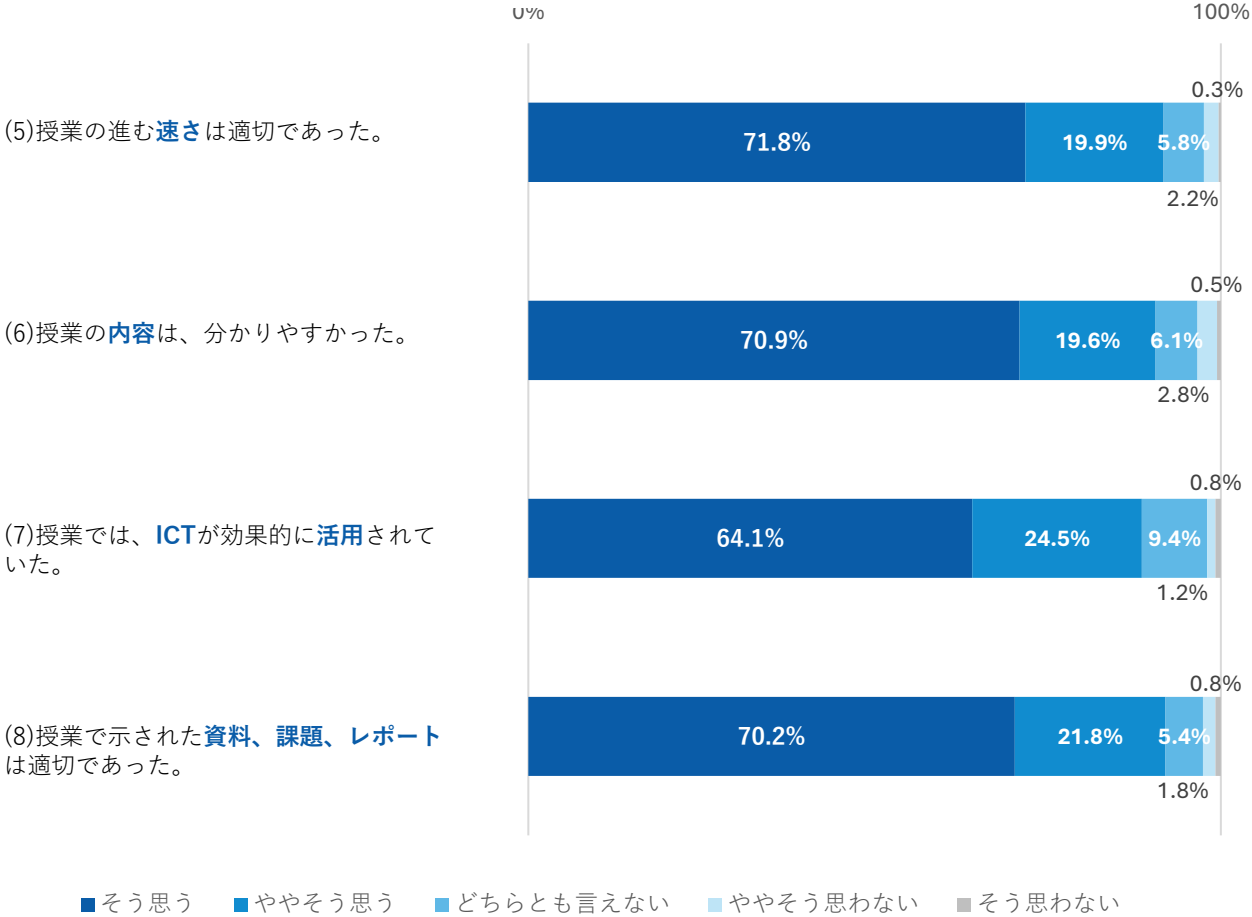
2025年度は、全項目でポジティブな回答（「**そう思う**」「**ややそう思う**」）の割合が**92%**を上回る良好な結果となった。特に(1)が**95.3%**、(2)が**95.1%**に達しており、シラバスに基づく**適切な授業構成と到達目標の提示が院生に概ね共有**されていることが伺える。前年度に課題とされた(3)については、ポジティブ回答の合計が**92.8%**（前年度**88.7%**）へと向上し、**9割を超える水準に達した**。**アクティブ・ラーニングの実施が院生の学修において着実に定着**しつつあることが伺える。本学が推進する探究的な学びのあり方が授業実践を通じて具体化される中で、院生の理解も一定の進展を見せている傾向として捉えられる。

今後は、この改善傾向を維持しつつ、さらに「強い肯定的回答（**そう思う**）」の層を広げていくことが展望となる。院生が自らの専門性の深化をより確かな手応えとして実感できるよう、**効果的なアクティブ・ラーニングのあり方を継続的に探究**し、さらなる教育内容の充実に繋げていくことが期待される。

[02] 授業の進め方について



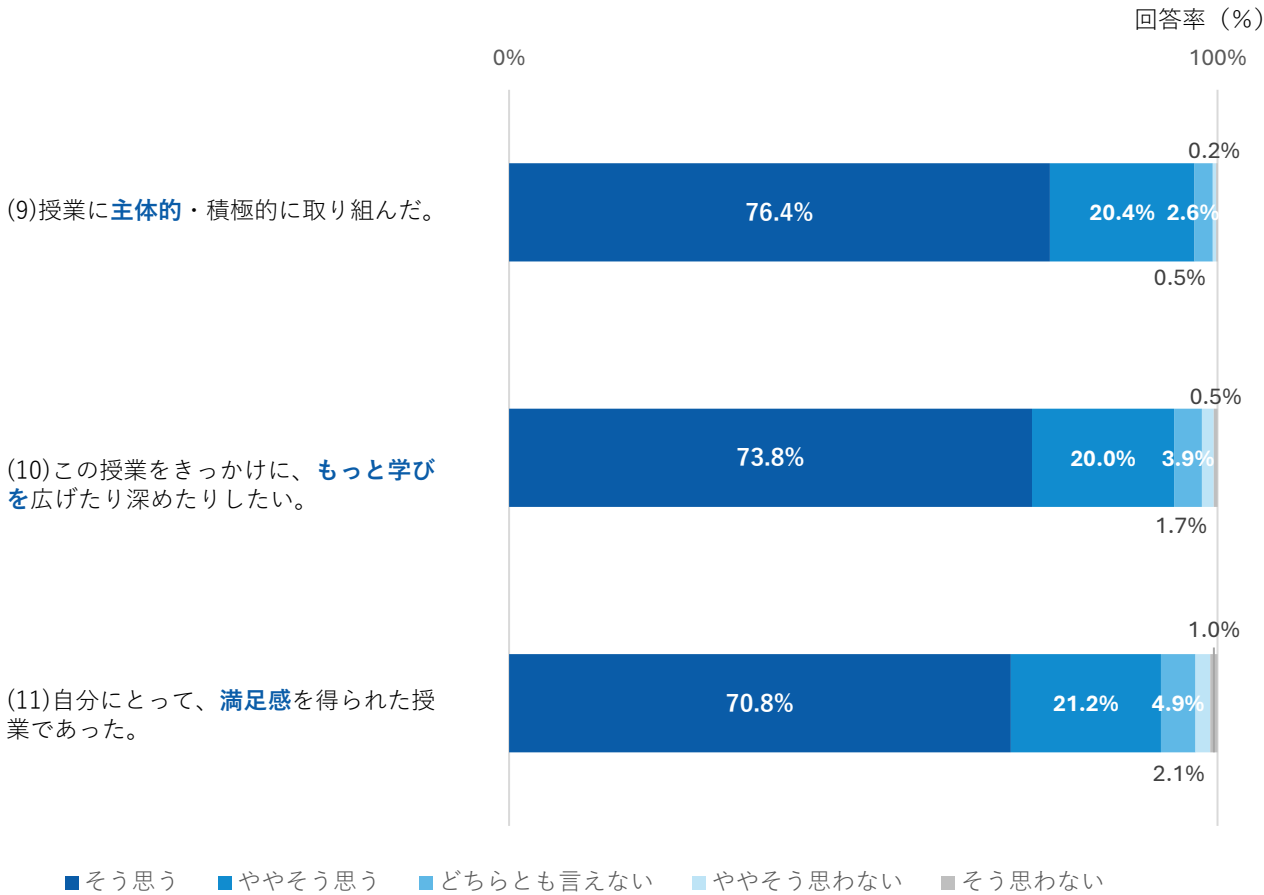
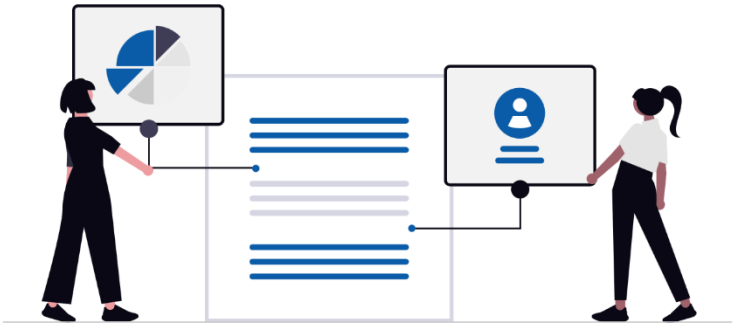
回答率 (%)



2025年度の結果では、全項目でポジティブな回答（「そう思う」「ややそう思う」）の割合が88%を超え、概ね良好な評価を得ている。特に(8)は92.0%（前年度89.3%）に達しており、**配付資料や課題の設定が院生の学修を適切に支えている**ことが伺える。前年度に改善の余地が指摘されていた(7)についても、ポジティブ回答の合計が88.6%（前年度84.9%）へと上昇し、数値の上では改善の兆しが見られる。しかし、強い肯定的回答（「そう思う」）の割合は64.1%に留まり、本項目群の中で引き続き最も低い数値となっている。**院生のICT活用に対する期待**に対し、授業内での活用を十分に効果的であると実感させるには、依然として工夫の余地がある現状が示唆される。

今後は、「ややそう思う」という層を強い肯定へと転じさせるような、さらなる質的向上が期待される。**ICT活用スキルのさらなる習熟**や、**院生の理解度に応じた柔軟な説明のあり方**を継続的に検討し、授業への満足度を底上げしていくことが重要な展望となる。

[03] 授業への取り組み・満足度について

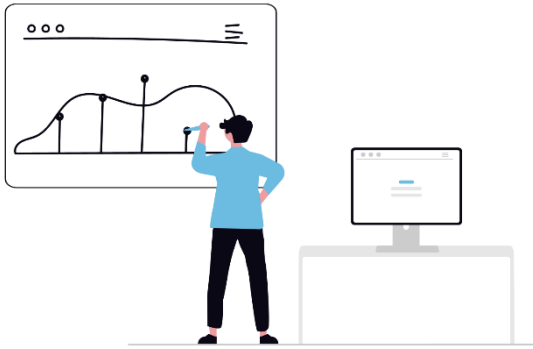


2025年度は、全項目でポジティブな回答の割合が92%を上回る良好な水準を維持した。特に、主体的な学修態度を示す(9)は96.8%に達しており、**院生が総じて積極的に授業に臨んでいる**実態が伺える。

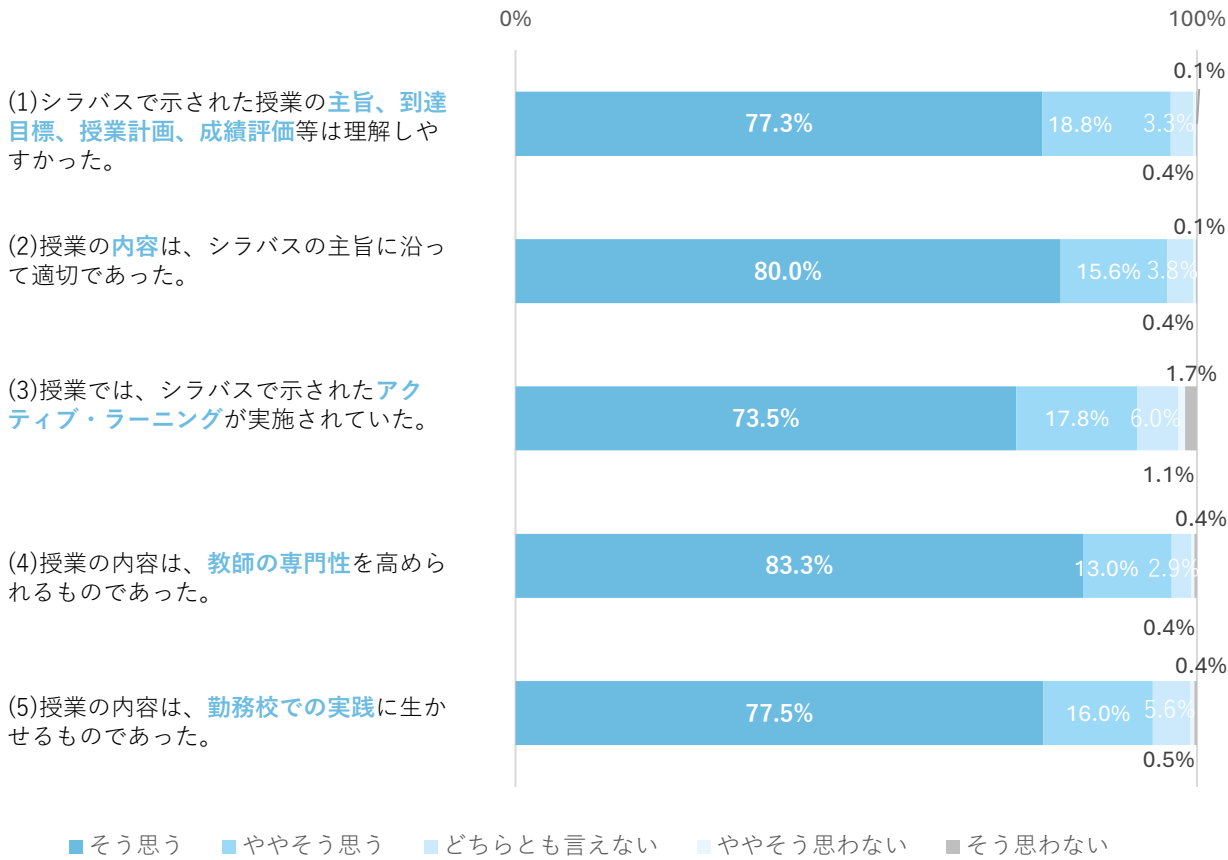
一方で、強い肯定的回答である「**そう思う**」の割合に着目すると、(9)が76.4%、(10)が73.8%、総合満足度を示す(11)が70.8%となっており、前年度比で数ポイントの低下が見られる。肯定的な評価の総数は維持されているものの、強い肯定層が7割台に留まっている現状からは、標準的な授業運営に対する評価に留まらず、**より個別の関心や高度な専門的ニーズに応える質的向上への期待**が推察される。

今後は、高い肯定率を維持しつつ、院生が学びの深化をより確かな手応えとして実感できるよう、**指導内容のさらなる高度化や、個々の探究を支援する環境づくり**を継続していくことが重要な展望となる。

[01] 授業の計画と内容について



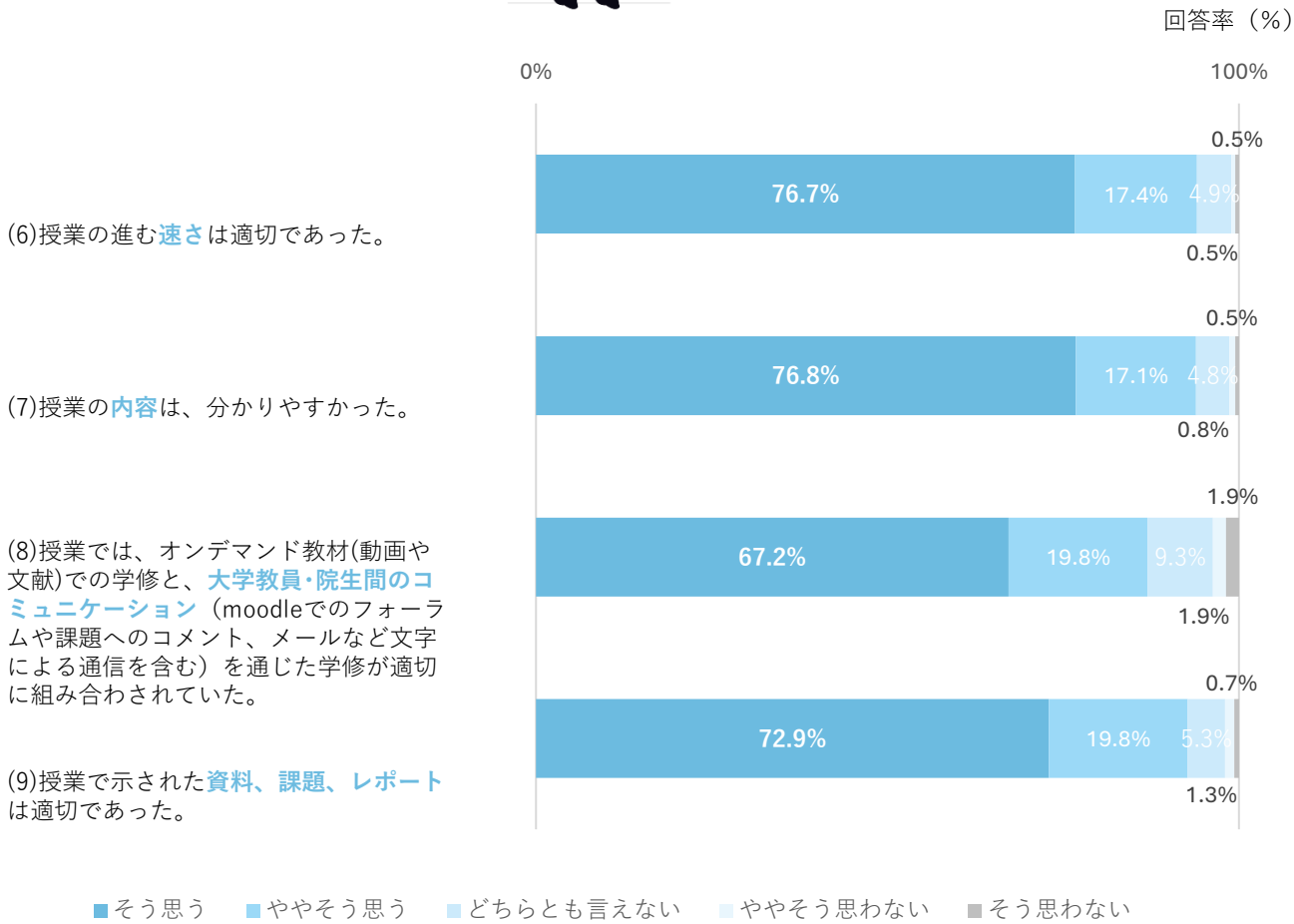
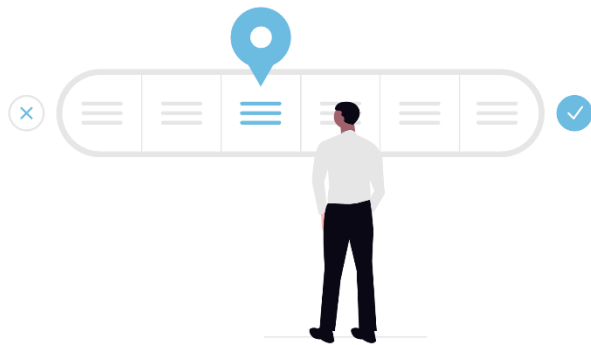
回答率（％）



2025年度の結果では、全項目でポジティブな回答の割合が91%を上回り、遠隔教育の質が安定的に確保されている。特に、教師としての専門性を高める内容であることを問う(4)が96.3%と極めて高く、非対面という形態においても高度な専門的知見の提供が十分に機能していることが伺える。強い肯定的回答（「そう思う」）の推移に着目すると、全項目において前年度を上回る改善が見られる。前年度は(2)が75.5%、(3)が64.7%であったが、今年度は(2)80.0%、(3)73.5%へとそれぞれ上昇した。特にアクティブ・ラーニングの実施状況を問う(3)における「強い肯定」の伸びは、遠隔授業特有の制約がある中で、双方向性を確保する工夫が院生に着実に浸透しつつある成果と捉えられる。

今後は、この質的な向上を維持しつつ、学修内容を勤務校の実践により深く結びつけるなど、遠隔教育の特性を活かした授業設計を継続していくことが展望となる。

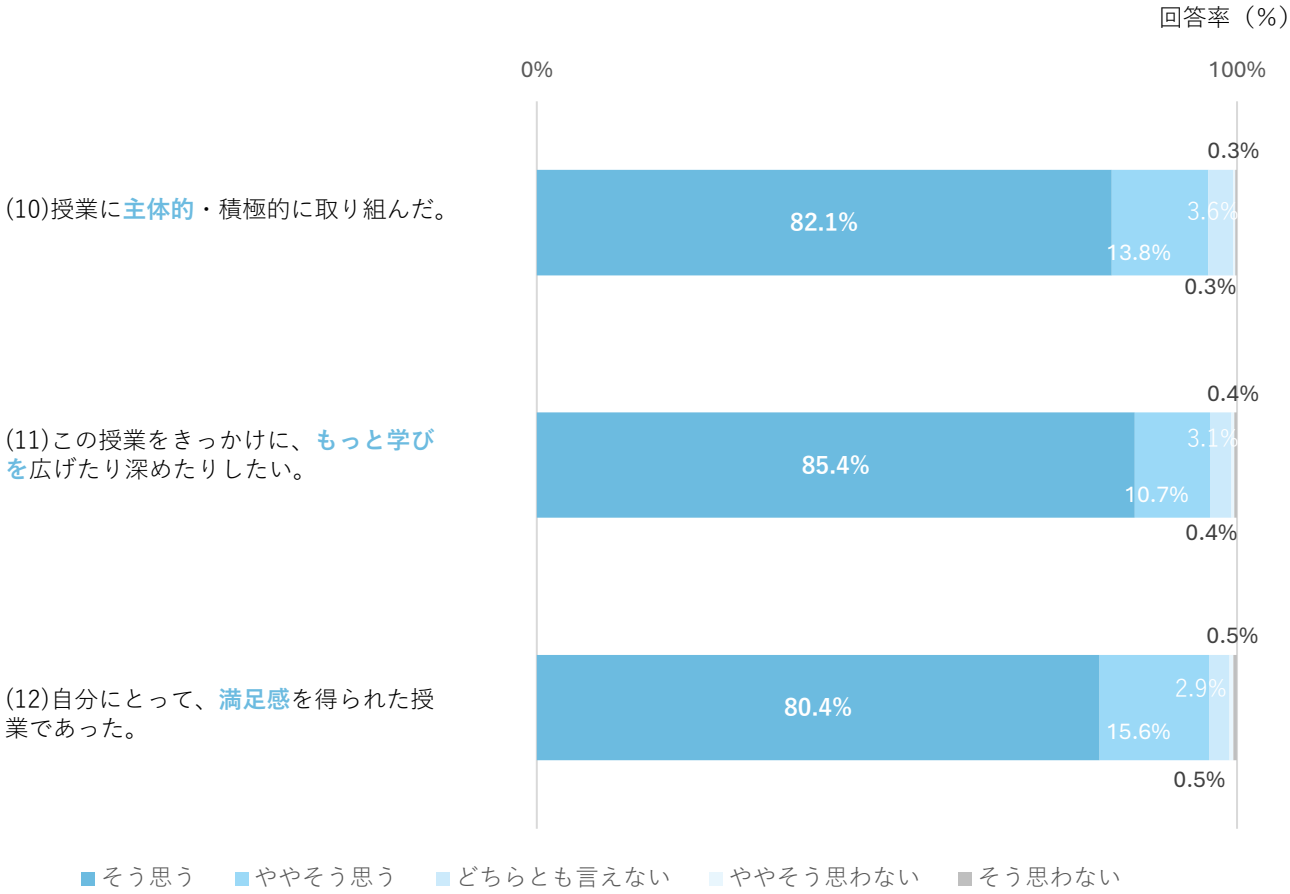
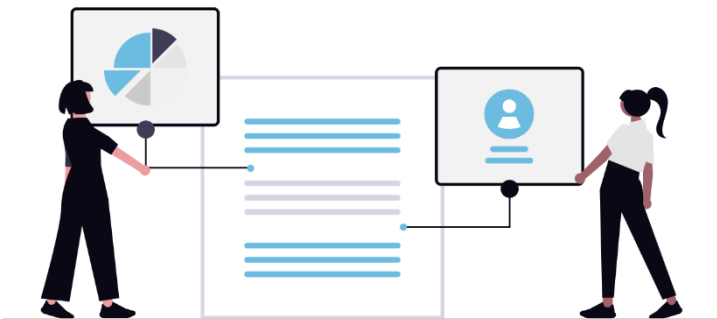
[02] 授業の進め方について



2025年度の結果では、多くの項目で肯定的回答が9割を超える高い水準にあり、遠隔授業の運営は総じて良好に推移している。特に(6)が94.1%、(7)が93.9%に達しており、**非対面環境下においても適切な授業速度と分かりやすい説明が維持**されていることが伺える。一方、教材と交流のバランスを問う(8)は肯定的回答が87.0%と項目内で最も低く、前年度から微減した。強い肯定層は67.2%へ向上しているが、総数が伸び悩んでおり、**院生のICT環境や時間的制約による交流実感の差**が推察される。

今後は、(8)の改善に向け、リアルタイムな質疑応答の場をさらに充実させるなど、新たな学修環境の構築を検討していく必要がある。教員やアドバイザーによる個別支援を強化し、教材と双方向のやり取りを有機的に関連付けることで、**専門性の探究を支える質の高い教育体制を継続的に追求**することが期待される。

[03] 授業への取り組み・満足度について



2025年度の結果では、全項目でポジティブな回答の割合が95%を超える極めて高い水準に達した。特に、主体的な学修態度を問う(10)では「**そう思う**」が82.1%（前年度73.2%）へと大幅に上昇し、遠隔教育という形態においても**院生が極めて意欲的に授業へ参画している実態**がうかがえる。総合満足度を示す(12)の「**そう思う**」も80.4%（前年度75.5%）へと向上しており、遠隔授業の質的な充実が院生の確かな満足感に繋がっていると言える。

今後は、この高い満足度を維持しつつ、**得られた知見を勤務校の実践へより円滑に還元できるような支援体制を継続**することが展望となる。遠隔学修の利便性を活かし、オンデマンド教材と双方向のやり取りをより有機的に組み合わせることで、**多忙な教職生活の中での学びの持続性を高めていく**必要がある。院生が自らの専門性の向上をより深く実感できるよう、個別のニーズに即した高度な教育内容の提供と、**院生間の学びを支える環境づくり**に引き続き注力することが期待される。

観点			(1)学校教育教員養成課程	(2)修士課程	専門職学位課程									
					(3)通学	(4)遠隔								
01	実施趣旨		「教育の内部質保証に関するガイドライン」（平成29年3月31日(独)大学改革支援・学位授与機構）、認証評価、「鳴門教育大学内部質保証方針」等において、教育プログラムが適切に行われていることを確認するための一つの方法として、学生からの意見聴取結果（授業評価等）データを活用した点検・改善が位置付けられている。											
02	回答方式		「Live Campus U」（以下LCU）（ https://lc-nue.naruto-u.ac.jp/lcu-web/ ）の「授業評価アンケート」メニュー											
03	実施手順		・ 教務課からLCU連絡にて学生へ依頼 ・ 各授業担当教員（複数担当の場合は最終授業担当者）から授業時間等に学生へ依頼											
04	実施時期		年間6回程度 06月上旬：前期（前半）授業の最終回時期 07月下旬：前期（後半）授業の最終回時期 08月下旬：前期（集中）授業の最終回時期 11月下旬：後期（前半）授業の最終回時期 12月下旬：後期（集中）授業の最終回時期 02月中旬：後期（後半）授業の最終回時期		年間2回程度 07月：前期終了時期 02月：後期終了時期									
05	実施時間		定期試験を除く授業の最終回のうち10～15分程度		受講完了後適宜									
06	回答期間		アンケート回答依頼日から1週間程度(※LCUメニュー上は年間回答可能)											
07	対象授業		本学担当教員（嘱託講師担当科目も含む）が開設する全ての授業科目（※ただし下表の観点を含む授業科目は対象外とする。） <table border="1"><thead><tr><th>観点</th><th>対象外とする授業科目</th></tr></thead><tbody><tr><td>研究指導でありシラバス対象外科目</td><td> ・ 卒業研究（学校教育教員養成課程） ・ 課題研究（修士課程） </td></tr><tr><td>ゼミ指導の科目</td><td> ・ 教育実践研究（専門職学位課程） </td></tr><tr><td>実質の担当教員が本学教員ではない科目</td><td> ・ 履修規程における「実習」区分の科目 </td></tr></tbody></table>				観点	対象外とする授業科目	研究指導でありシラバス対象外科目	・ 卒業研究（学校教育教員養成課程） ・ 課題研究（修士課程）	ゼミ指導の科目	・ 教育実践研究（専門職学位課程）	実質の担当教員が本学教員ではない科目	・ 履修規程における「実習」区分の科目
観点	対象外とする授業科目													
研究指導でありシラバス対象外科目	・ 卒業研究（学校教育教員養成課程） ・ 課題研究（修士課程）													
ゼミ指導の科目	・ 教育実践研究（専門職学位課程）													
実質の担当教員が本学教員ではない科目	・ 履修規程における「実習」区分の科目													
08	アンケート項目		別紙「アンケート項目」参照											
09	アンケート結果の取扱い		・ 組織的な内部質保証への活用：授業評価専門部会を設置して「授業評価報告書」（全体データ分析中心）を作成し、HP公開及び学内の内部質保証機関へ適宜提供する。 ・ 教員個人レベルの自己点検への活用：LCU上で、担当科目に係る学生の回答（匿名）の閲覧が可能。同メニュー機能上、教員コメントを入力することも可能。（ただし「授業評価報告書」において授業科目別の情報は表示掲載しない。）											
10	備考	...	なお、大学間連携等により他大学の教員が開設する授業科目は、別途共同的に授業評価等の内部質保証体制を構成している場合もある（例：連携教職課程科目等）ため、本件学内授業評価とは別に位置付けて整理する。											

17

教務委員会			
梅津 正美	副学長	委員長	
山田 芳明	特命補佐	副委員長（学部教育担当）	
武田 清	教授	グローバル教育コース（副委員長（大学院教育担当））	
古川 洋和	准教授	心理教育コース	
幾田 伸司	教授	国語科教育コース	
千菊 基司	准教授	英語科教育コース	
伊藤 直之	教授	社会科教育コース	
藤原 大樹	准教授	数学科教育コース	
福地 里菜	准教授	理科教育コース	
宮本 賢治	教授	技術科教育コース	
小野瀬裕子	講師	家庭科教育コース	
日下 瑤子	准教授	音楽科教育コース	
武内 優記	准教授	美術科教育コース	
齋藤 祐一	准教授	保健体育科教育コース	
谷村 千絵	准教授	教育探究総合コース	
高橋 眞琴	教授	特別支援教育コース	
木村 直子	教授	幼児教育コース	
大林 正史	准教授	学校づくりマネジメントコース	
池田 誠喜	教授	生徒指導コース	
長井 映雄	准教授	学習指導力・ICT教育実践力開発コース	
馬場 大樹	准教授	教員養成特別コース	
湯口 雅史	教育実習総合支援センター所長		
富士 晶次	教務課長		
藤原 伸彦	セルフデザイン型学修支援センター所長		



学生による授業評価専門部会			
宮本 賢治	教授	主査	
谷村 千絵	准教授	委員	

年度	月	学校教育学部教務委員会 大学院学校教育研究科教務委員会	学生による授業評価専門部会
令和7年度	4月	 各専門部会の設置	
	5月	 授業評価実施（前期前半分）	
	6月		 R7第1回専門部会
	7月	 授業評価実施（前期後半分）	
	8月		
	9月	 授業評価実施（前期集中分）	 R7第2回専門部会
	10月		
	11月	 授業評価実施（後期前半分）	
	12月		
	1月	 授業評価実施（後期集中分）	
	2月	 授業評価実施（後期後半分）	
	3月	 R7授業評価集計	
令和8年度	4月		
	5月		 R8第1回専門部会
	6月		 本報告書(案)の作成
	7月		
	8月		R8第2回専門部会
	9月	 本報告書の確定・HP公表	
	10月		
	11月		
	12月		
	1月		
	2月		
	3月		

授業評価報告書 2025

発行日 2026(令和8)年9月2日

編集 鳴門教育大学教務委員会

発行 国立大学法人鳴門教育大学
住所 〒772-8502徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748番地
TEL 088-687-6194
URL <https://www.naruto-u.ac.jp/>